

論文審査の結果の要旨

氏名 南雲 直子

長期の河川プロセスによって形成される沖積平野は、居住や食糧生産の場、政治・経済の拠点として古代より文明繁栄の舞台となってきた。同時にこうした地域では水文・地形環境変化の影響を被りやすく、河川を中心とした効果的な水利用が文明の発展に不可欠であった。古代社会の復元には、地形や堆積・水文環境の動態やその変動に着目した定量的な研究と、遺構や遺物に基づく考古学的研究の融合が必要である。

熱帯モンスーンアジア気候下のカンボジアでは、多くの遺跡群が存在する。こうした遺跡の研究はフランス植民地時代より進められてきたが、プレアンコール時代の遺跡調査はアンコール時代と比べて遅れている。しかし、他に類を見ない大規模石造建造物を伴い、カンボジア史の最盛期とされるアンコール時代の成立背景を明らかにするには、プレアンコール時代の社会に関する知見の蓄積が必要である。プレアンコール時代の王都に比定されているサンボー・プレイ・クック遺跡群はセン川に隣接し、世界の他の文明と同様、王都繁栄には河川環境が密接に関係していた可能性がある。以上をふまえ、本論文は、カンボジアのサンボー・プレイ・クック遺跡群とセン川下流域を対象として、古代都市成立の背景にある自然環境要因について、特に河川地形に着目して検討した。

本論文は以下の7章によって構成されている。

第1章では、既往研究に基づき、古代社会と河川地形との関係、考古学分野と自然科学分野の学融合研究の必要性を述べ、従来のカンボジア古代社会研究の問題点を説明している。またカンボジア史を概観し、本論文の構成について説明している。

第2章では対象地域であるカンボジアとセン川流域の地勢・地理について述べ、サンボー・プレイ・クックとセン川の概要説明と、サンボー・プレイ・クックに関する先行研究がレビューされている。

第3章では、プレアンコール時代からアンコール時代初期に建設された5つの都城を取り上げ、それらが持つ構造や機能と周辺環境との関係について考察した。その結果、これらの都城中心部はいずれも雨期の洪水氾濫の影響を受けにくい地形面上に建設され、周囲は天水田による稲作や減水期稲作が可能な比

較的平坦で水を得やすい土地であること、さらに水上交通路として機能する河川や湖に近接することが示された。

第4章では、セン川下流域の地形分類と現地調査、採取試料の分析を行い、以下の点を明らかにした。すなわち、セン川は深さ7m、幅100mほどの河道を形成し、氾濫原を蛇行しながら流下する。メアンダーベルト内では河道位置が変化しやすく、短期間で堆積物が入替わる。他方メアンダーベルト外の氾濫原では、過去35000年間にわたって約0.1~0.6mm/yrの堆積が続いてきた。台地と氾濫原においては、プレアンコール時代以降に大きな地形変化は認められない。

第5章では、プレアンコール時代の都城建設と効率的な水上交通運営の両立という視点で、セン川下流域の地形を評価した。都城建設は台地が適し、水上交通運営には氾濫原上の微高地が適すること、これらを両立しうる場として、現在のサンボー・プレイ・クックが合理的に選択されたことを指摘している。

第6章では、第5章までの議論を基にサンボー・プレイ・クックとセン川の下流域の地形環境との関係について総合考察している。プレアンコール時代当時には、セン川を中心とする水上交通路によってその繁栄が支えられていたこと、アンコール時代には陸上交通路に依存した線的な支配を行う統治形態に変化したことを指摘している。

以上を踏まえ、第7章では結論を述べている。

このように、本研究は、現地調査を重ね、雨季と乾季の季節変動の激しいカンボジアのセン川の沖積平野と周辺台地の生い立ちと微地形の分布の特徴を明らかにして、プレアンコール社会の存立基盤としての河川の重要性を実証的に論じたものである。当時の社会が、災害発生源としての河川および交通路としての河川の存在に強く依拠し、河川理解が不可欠であった様子が浮かび上がってきた。道路建設による新たな動線の確保と広大な後背地の開発が、人口の急増とアンコール期への発展に結び付けられて論じられており、土地開発と自然環境の関わりの変化史の一端をもとらえている。理科系と文科系を融合する幅広い視点に立って、モンスーン地域の河川環境と古代社会の関係に、新たな知見をもたらすことに成功した本研究のオリジナリティは高く評価できる。

なお、第4、5章は、須貝俊彦・久保純子との共同研究であり、申請者を筆頭とする共著論文として公表されたものであるが、申請者が主体的に取り組んだ成果であり、博士論文研究の一部として、認定できる。

以上の理由により、博士（環境学）を授与できると認める。